市長賞

敏雄伯父さん

内山京子

八月の母方の親戚の親睦会の知らせを受け、母はこの日を心待ちにしていた。お盆休みを利用して東京から妹も帰省し、仕事の都合で静岡県東部に住む妹の長男も合流して四人で浜名湖畔のホテルに向かった。三年程前から浜松の本家を継いでいる若夫婦が主体となって始めた親睦会だが、今年は何人かの従兄弟達の参加もあるようで、いつにも増して賑やかになりそうだ。親睦会が始まる随分前に指定されたホテルに到着したが、既にロビーに懐かしいメンバーが集まり始め、久々の再会を喜び合い、近況報告に余念がない。私達は浜松市から離れた場所に住んでいるので、その日はホテルに宿泊の予約をしていた。挨拶だけして部屋に荷物を置いて再びロビーに行くと、ほとんどのメンバーが揃っていた。先程はお風呂に入りに行って姿が見えなかった男の従兄弟達も、風呂上がりのさっぱりとした表情で談笑していた。

「良いお湯だったよ。まだ三十分あるから、入ってくればいいのに」

そう簡単に言われても、この年頃の大人の女性ともなると、一旦お風呂に入ると人前に出るまでに相当な時間

を要することを簡単に説明して、お風呂は後回しにしてせっかくの再会を堪能することにした。本当に子どもの時以来、五十年ぶりくらいの従兄弟もいたが、昔の面影があぶり出しのように今の面差しと重なって、懐かしさがこみ上げてくる。誰の上にも同じように流れてきた時間を感ぜずにはいられない。

一通りの挨拶を済ませた頃、ゆっくりと車椅子の本家の伯母とその横に寄り添う伯父が現れた。きっと出がけに忘れ物でもして時間がぎりぎりになったのだろう。伯母は数年前に農道で自転車ごと転んでから体が不自由になり、出かける時は車椅子を使っている。住み慣れた自宅での生活は、つたい歩きで移動できるが、長い距離の移動や初めての場所は本人も家族も不安なようだ。

「やい、おばぁ気をつけろや」

伯父の言葉は荒削りだが、伯母を気遣い、眼差しは常に伯母に注がれている。

「ありがとねぇ」

いつものように両掌を合わせて拝むように感謝する伯母の小さな姿が何とも可愛らしい。

宴会の開始時間が近づき、ホテルの従業員の案内で二階の宴会場に通される。総勢二七名の宴会は、小規模の会社の忘年会のようだ。平均年齢は少々高めだが、老若男女入り乱れて思い思いの席に着く。年長者を上座に据えて、向かい合わせ三列の構成だ。勿論最年長の伯父は一番上座だが、伯母は車椅子のまま実の娘の横で、トイレに行きやすい場所に陣取っている。飲み物の用意が整うと、今日のお膳立てをした本家を継いでいる従弟が挨拶をした。ここで乾杯という時、伯父がやおら席を立った。

「一言挨拶を、今日はゆっくりしていってください。乾杯」

絶妙のタイミングで良いところをもっていくのだが、そのさらっとしたやり方とくしゃくしゃの笑顔に誰もが納得してしまう。

敏雄伯父は、大正一三年に内山優太郎・みつ夫妻の六男六女の四男として、浜松の引佐郡細江町に生を受け

た。すぐ上の明義とは年子で、充分な栄養もなく未熟児として生まれ、こんな小さな赤ん坊は育つまいと言われ、小学校低学年までは体育の授業も見学するのが常だったそうだ。家は貧しい農家で、当時浜松の地場産業として推奨されていた「るいきゅう」という畳表の仕事をしていた。優太郎は学者肌の紳士で、いつも身なりをきちんと整え、地元に住んでいた元帝大の先生の家に出入りして書生のようなことをしていた時期もあったようだ。しかし、敏雄伯父の下に弟や妹が次々に生まれると、食べることに追われ、貧しい生活に追い込まれていった。幸い農作物を作っていたので、上の子ども達が畑仕事や子守を担当して、やっと生活をしていたようだ。戦争の兵力増強に向けて産めよ増やせよの時代で、母親のみつは総勢一二人の子どもの世話に明け暮れていた。やがて家族の元へも赤紙が届き、長男恭平と三男明義は徴兵された。二男は病気のため、大正六年に幼くしてこの世を去っている。二人の姉と一人の妹は紡績工場に働きに出ていたが、給料は全て家計費にまわされ、自分で使ったことは一度もなかったと聞いた。いよいよ戦況も厳しくなり、四女の私の母も豊川の海軍工廠で弾丸の傷の有無を調べる仕事に就いていた。勿論敏雄伯父の元へも兵役検査の呼び出しはあったが、元々体が弱く、女性としても小柄な身長一五六センチの私より更に小さい伯父は、乙種合格になることも難しかった。かろうじて丙種合格だったが、闘病中だったこともあり徴兵されることはなかった。周りの男の人達が次々に徴兵されていく中、どんな思いで家を守ってきたのかを思う。

そんな中、昭和一九年暮れに三男明義の戦死の通知と共に、遺骨を渡すので公民館に来るように言われたそうだ。その頃既に家の実務を任されていた敏雄伯父は、気落ちして公民館に行くこともできない優太郎に代わって、公民館で遺骨が入っているとされる箱を受け取って家に帰った。その箱のあまりの軽さに不信感を抱き、自宅で箱を開けると、「明義の霊」とだけ書かれた紙が入っていたそうだ。

「こんな紙切れ一枚で死んだって言われて、納得できるか」

普段は決して言葉を荒げたり、感情を表に出さない伯父の険しい表情を初めて見た。昭和一九年一一月一三日命日二二歳　明義伯父は、身体頑強で頭脳明晰、運動神経にも恵まれた早稲田の学生だった。

そして昭和二〇年終戦を迎え、海軍に所属していた長男恭平は無事復員して所帯を持ち、浜松市内に移り住んだ。適齢期を迎えた姉達もそれぞれ良縁に恵まれ独立していったが、相変わらず生活は厳しかった。敏雄伯父も妻を迎え四男一女を次々に授かるが、戦後の混乱の中で、農業の傍ら近所の中田建設で日雇いの仕事をしながら必死で働いた。四〇歳を迎えるころには自分の会社を設立し、がむしゃらに努力したそうだ。充分な教育も受けておらず、教養もなく図面も満足に読めない自分が信用を勝ち取っていくためには、人並みの努力では叶わないと腹をくくったと語っていた。日々の地道な努力とその人なつっこい人柄で、仕事は順調に軌道に乗り、役所の入札にも参加できるまでになった。戦後間もない頃、優太郎が足を怪我した時には、家にある唯一の乗り物、リヤカーに祖父を乗せて山一つ向こうの医者まで診てもらいに行ったそうだ。しかしこの頃には、仕事に必要なトラックや作業車や乗用車が何台か所狭しと置かれるようになっていた。

優太郎は昭和三四年一二月二一日七一歳でこの世を去ったが、兄弟姉妹は、その後も母親みつと敏雄夫妻を頼って、夏休みと正月休みには子ども連れで集まり、親戚中の子ども達の合宿所のようになるのが恒例だった。子どもの数も二人なのは会社員の我が家だけで、それぞれ商売を営む他の家は、三人から五人の多産の家系だった。昔の土間に設えたかまどでご飯とみそ汁を炊き、土間続きの座敷の長いテーブルにずらりと並んで、大人と子どもに分かれて、何度か交替して賑やかにご飯を食べた光景は忘れられない。食事をする部屋の隣には居間があり、お客は居間の火鉢の前で煙草をくゆらせている優太郎に挨拶をしなければ座敷に上がれない仕組みになっていた。私の父も、私達を連れて本家を訪れ、両手を畳について深々と頭を下げ、呪文のような挨拶をしていたことを、幼いながら覚えている。それにしても、火鉢の前で煙草の匂いがしみ込んだ着物を着てロイドメガネをして難しそうな本を読んでいた祖父は、威厳に満ちて近寄りがたい存在だった。外出の時は、マントを羽織って帽子を被りステッキを持っていたが、その姿が何とも板についてかっこよかった。伯父の話によると、昔一等列車の切符を持たずに一等列車に孫と乗った。あまりに堂々としていたので、検札の国鉄職員に問いただされる事無く東京から浜松までそのまま帰ったことがあったそうだ。今でも祖父の葬儀が終わって、

墓地に愛用のステッキと帽子とメガネを収めたことを覚えている。それまでも、伯父は実質的な家長としての仕事はしていたが、祖父が担っていた全ての役割を引き継いだことは、大変な重荷だったに違いない。

懐かしい思い出がたくさん詰まった家も、何度かの大水で浸水し、私が覚えているだけで三回程家を建て替えた。家業が土建屋でも相当な出費だったはずだ。祖母みつも、その度に難を逃れて、大勢の孫やひ孫や玄孫に囲まれ、平成四年一二月三日、一〇一歳の大往生を遂げた。晩年は、いつも同じことを繰り返すと伯父に小言を言われていたが、最期まで身の回りのことは自分で行い、呆けることもなく、実に見事な去り際だった。亡くなる前に突然起き上がって、新しい肌着に着替えて息を引き取ったという伝説の人だ。いずれにしても、敏雄伯父は若い頃は自分の母親を、そして晩年は認知症が始まり少し体が不自由になった妻の世話を親身になって焼いている。自然な優しさが微笑ましい。

出席者の近況報告を兼ねた自己紹介も終わり、宴会のお料理もすすんだ頃、伯父が伯母の席に様子を見に来た。

「こんなに食べて、また下すぞ。志保さんに下の世話までさせるわけにはいかんでなぁ」

同居の嫁にも心配りを忘れない。

「伯父さん、今日のシャツとズボン決まってるじゃん」

いつもの作業着と違う洋服を褒めると、

「そうかぁ？　志保さんがこれを着るように用意してくれたでなあ。何でも志保さんのいうとおりだ」

と照れ笑いする。本当に愛嬌がある伯父さんだ。伯母の車椅子の操作を担当していた甥は、

「『おじぃ、これ食べな』って言われた」

と苦笑いしていた。甥は敏雄伯父が大好きで、事あるごとに一緒に浜松を訪れている。

「長くは生きられんと言われたわしが九四まで生きるとはなぁ。わからんもんだなぁ。九五までは自信がある

ぞ」

お茶目に笑いながら言ってのける。

大勢の孫やひ孫に囲まれ、会社は末の息子に任せて趣味で農業を楽しんでいる。運転免許は随分前に返納したので、農協への納品は愛用の大きなバスケットを備えた三輪車で出かける。今でも新聞には必ず目を通し、世界情勢や政治やスポーツにも興味を示す。会ったばかりなのに、しばらくするとまた会いに行きたくなる自慢の伯父だ。